

語を母語とする者が) その「条件異音」を聞き分け、書き分けていたのかを率先して説明しているはずなのに、それには頬被りをしていることです。

氏は上代において何故「条件異音」が書き分けられているかに関して

(要するに「上代特殊仮名遣い」とは「音素体系と書記体系とのズレ」であり)

「音素体系と書記体系とのズレはある言語の表記のために外来の文字がはじめて適用される場合にしばしば起こる現象であって、特にその初期の段階にあつては、書記法が当該言語の音韻の体系に完全に合致することはむしろ稀であると言ってよい」(下線筆者)

(前掲書86ページ)

とし、そのようにして生じる「音素体系と書記体系とのズレ」の事例として、紀元前10世紀頃、無文字言語であったギリシャ語にフェニキア文字が適用された際に、ギリシャ語の条件異音¹¹が書き分けられていた、という例を挙げ具体的に説明しています。

このこと自体に筆者も別に異論はありませんが、「人は母語の(条件)異音は聞き分けられない」のですから、フェニキア文字でギリシャ語の条件異音¹¹が書き分けられていたなら、書き分けていたのは(少なくとも最初にその表記体系を作ったのは)フェニキア語を母語とする者に決まっています。

こんなことは史実が解つていようがいまいが関係なく、「異音」という概念から必然的に演繹される結論。

ところが、松本氏は「上代特殊仮名遣い」に関しても、ギリシャ語に関しても「外国人が書いた(表記体系を作った)」とは一言も述べておらず、その可能性の示唆もしておらず、普通に読めば、氏は「上代特殊仮名遣い」で/O/母音の条件異音を書き分けていたのは日本人自身、ギリシャ語の条件異音を書き分けていたのはギリシャ人自身だったと主張しているとか考えられず、現実¹²にその読者(大半は国語学者)は、支持者・

批判者を問わずそのように理解して30年間も論議を続けているのに、氏はそのことに関しては何の注意も訂正もしていません。

ということは、松本氏自身も奈良時代に日本語の条件異音を書き分けていたのは日本人自身だと思っているということであり、そう思っているということは、氏は「異音」(allophone)の概念をマトモに理解していないということです。

そこから、逆に、氏の何を言ってるのかよくわからない「条件異音説」の中身を類推すれば、やはり「母音交替」(vowel exchange)などという概念を持ち出しています。

「母音交替」とは「アオ+ウメ→オウメ」「サケ+ヤ→サカヤ」といった話者自身が自覚している変音現象であり、第五章やコラム10で述べたように、これらを「条件異音」と混同するのは典型的な誤解なのですが、松本氏もまたその誤解を犯しているのです¹¹。

これだけで、音声学の論文とすれば0点。

筆者が指導教授で学生がこんな論文を書いてきたら「音声学というものを、基礎の基礎から勉強し直してこい！」と怒鳴りつけるところです。

松本氏のトリック

但し、松本氏の名誉のために申し上げれば、松本氏自身は「日本人自身が日本語の条件異音を書き分けていた」という自説のバカバカしさにうすうすは気づいており、外国人記述の可能性も視野に入れていたと思われ¹²ます。

というのは、まず上のように「音素体系と書記体系とのズレはしばしば起こる現象」としながら、その例示を紀元前10世紀頃のギリシャ語の例一つに止めていることです。「しばしば起こる現象」なら他の言語の例

11 松本氏は「conditional allophone」を「変異音」と呼んでいます、「変異音」は「条件異音」(conditional allophone)を包括する上位概念である「conditional variant」の訳語であり、このこと自体が氏が「異音」(allophone)の概念を理解していない証拠だと言えます。コラム10を参照ください。

を色々挙げて、自説を強化すればいいのに、なぜ、こんな大昔の例一つに止めたのでしょうか？

それは、もっと近い時代の他の言語の例は「ある言語の表記のために外来の文字を初めて適用」したのが「外国人」であることが史実としてはっきり分かっているからでしょう。

例えば、ローマ帝国の国語であったラテン語には当初文字がなく、ギリシャ人を招聘してギリシャ文字（松本説によれば元はフェニキア文字ですが）で文書事務をやらせていました。その状態が何百年か続き、その間に教育制度が整い、自前の人材が育ってきて、やっとギリシャ文字を改良してラテン語を記述するための「ローマ字」が発明され、普及していったのです。

モンゴル語も無文字言語でしたが、12世紀にジンギスカンが出て帝国として発展する段階で言語の文書化が必要となり、ウイグル文字（トルコ文字）を借用して記述されるようになりましたが、その表記体系を作ったのはウイグル人の「タタトンア（塔塔統阿）」という人物。その後、クビライの時代にチベット文字を改良したパスパ文字という独自の文字を作りましたが（作ったものの殆ど普及しませんでした）、それを作った「パスパ（八思巴）」という人物も、これまたモンゴル人ではなくチベット人です。

近世・近代、欧米列強によるアジアやアフリカの植民地化が活発になり、植民地人の言語が宗主国の欧米人によってローマ字で表記されるようになりましたが、現在使われているフィリピンのタガログ語の表記体系の原型を作ったのは宗主国のスペイン人、ベトナム語はフランス人、インドネシア語はオランダ人、マレー語はイギリス人。

松本氏はさすがに様々な言語に通じた言語学者、これら他言語の歴史は知っており、そこから類推して、「ひょっとしたら、ギリシャ語にフェニキア文字を適用したのはフェニキア人？日本語に借音仮名表記を適用したのは朝鮮人か中国人？」ぐらいには思っていたはずですが、そんなことを言い出せば、徒な紛糾を招き、せつかく完成しかかった自分の理論が崩壊してしまう……それを恐れて、わざと読者として想定される回

語学者には馴染みの薄い古代ギリシャ語、それも史実のはっきりしない3000年も前の例一つにとどめてお茶を濁したのでしょう。

さらに、氏がその主論文「古代日本語母音組織考」に「一内的再建の試み一」という副題をつけていることがこのことを裏付けます。

氏の言う「内的再建」とは、「一つの言語の歴史を他言語との比較・類推で考えるのではなく、当該言語の内部から言語史を再構築していく」ということですが、これは上のような「ある言語の表記の為に外来の文字を適用したのは当該の外国人」という数多くの史実から読者の目をそらすためのトリックだと考えられます¹²。

氏がこのようなトリックまで用いて「外国人記述説」から目を逸らそうとしたのは、筆者説に対する大方の反応を見ればわかるように、誰しもが天然自然の理の如く『記紀万葉』を書いたのは日本人」と信じ込んでいる時代に、「上代特殊仮名遣いは外国人の用字法」などと言い出すことは相当に勇気のいることで、そんなことを言い出せば言語学次元の「条件異音説」よりも、歴史学者などを巻き込んだ「外国人記述説」を巡る論議の方が沸騰してしまう……それを恐れてのことでしょう。

この1975年当時にはまだ、森重敏氏の「上代特殊仮名遣い渡来人記述説」や森博達氏の「日本書紀α群中国帰化人記述説」などは出ておらず、氏が他言語の事例からその可能性を考えつつも、徒な紛糾を避けるためにそこから目をそらしたかった気持ちはよくわかります。

しかし、そう堂々と言えなかったことが氏が「異音」の概念をマトモに理解していない証拠。

このように「日本言語学会」の会長までつとめた「大先生」までがマトモに理解していないのが「(条件)異音」という概念。この概念をマトモに理解している人間が如何に少ないか、これでお分かりでしょう。

12 「トリック」と言っているのは、氏を侮辱しているのではなく、言語学者としての氏の経歴を考慮に入れて好意的に言っているのです。もし、これがトリックでなく、氏が他言語の事例も知らず、何の疑念もなく古代ギリシャ人や日本人が自らの言語の条件異音を書き分けていたのだと信じているのなら、言語学者など名乗る資格はありません。